

一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 世界のすべての言語は、「若者言葉」と呼ぶことのできる一群の表現を持っています。若者言葉はいずれも、若者のあいだのカジュアルなコミュニケーションにおいてのみ用いられる隠語の一種であり、フォーマルな文章にこれが姿を現すことはありません。また、若者言葉には、流行語としての側面もあります。「若者」ではない人々なら、自分が若いころに使っていた言葉、A、同年代の人々が使っていた言葉を思い出すことにより、若者言葉に交替のあることはすぐにわかるはずです。

最初は若者言葉であつたものが使用される範囲を広げ、普通の会話で用いられる表現として流通するようになる例があります。たとえば「かつこいい」「かつこ悪い」は、戦後のある時期に若者言葉として姿を現したものの一つです。明治生れ、大正生れの人の中には、「かつこいい」「かつこ悪い」に抵抗を感じる人がいるかも知れません。私が小学生のころから少しずつ耳にするようになった「いまいち」「ダサイ」もまた、若者言葉から普通の会話表現に格上げされたようです。

B、新しく姿を現した若者言葉に、「やばい」という形容詞があります。この形容詞は、もともとは、何か都合の悪いもの、危険なものを指し示すために使われていました。しかし、若者言葉として使われる場合、これは、本来の否定的な意味を失い、「注意を向けるに値する」ものがて、「へ俗」「へ口」などの記号とともに国語辞典に登載され、普通の形容詞として流通するようになるかも知れません。

「やばい」に似た言葉は、他の言語にも見出すことができます。たとえばドイツ語では、toil(トル)という形容詞がこれに当たります。英語の形容詞 nice(ナイス)と同じように、もともと「気が狂った」という意味を持つこの形容詞は、一九八〇年代に若者言葉となつたとき、本来の否定

的な意味合いを失い、単なる「すごい」ことを表すために使われるようになります。私は、大学に入学してドイツ語の勉強を始めてすぐ、ドイツ語の教科書で Das ist ja toll! (「そいつは本当にすごいね!」) という文に出会いました。ただ、私がそのころ使っていた古い辞書の toll の項目には、若者言葉としての用法がまだ記されておらず、この文の意味がわからなかったことを憶えています。

私は、若者言葉としての「やばい」を使うべきではないと考えています。少なくとも、自分自身の言葉としてこれを使ったことはありません。③ というのも、「やばい」を使うことにより、感情の質がいちじるしく傷つけられ損なわれるように思われるからです。

「やばい」は、大変に便利な言葉です。注意を向けるに値するような性質を具えた事柄はすべて、「やばい」と表現することが可能だからであり、「やばい」の使い方さえ身につければ何にいても、適切な言葉の選択に頭を悩ませるつらい作業をすべて免れることができるからです。

とはいえ、一つひとつの事柄には、ユニークな性質があり、このような性質を受け止めるときに私たちの心に現れる気持の一つひとつにもまた、他に替えることのできない個性が認められねばなりません。日本語の豊かな語彙は、このような個性の差異を正確に表現する努力の中で、ながい年月をかけて形作られてきたものです。

「やばい」の一語を使えば、事柄の性質や自分の気持に適合する言い回しを工夫する面倒な作業を省略することが可能になります。しかし、たとえば、一〇〇種類の表現を「やばい」によって置き換えることが許されるようになるとき、生き残るのは「やばい」であり、一〇〇種類の表現の方は、死語になることを避けられませんか。一〇〇種類の表現の使い方を記憶し、使い方をたえず工夫することは、脳に大きな負担を強いるからです。「やばい」という万能の代用品をただ一つ憶えている方がよほどラクであることは間違いないでしょう。

ただ、「やばい」が使われるかぎり、私たちの言語使用の能力がその分だけ損なわれることは確かです。「やばい」に慣れた者にとり、この言葉の使用をあえてみずからに禁じ、これを場面に応じて適切に言い換える作業は、途方もなくつらい作業になります。これは、滅多に使われることなく痩せ衰えた筋肉を無理やり動かす労苦に似たものとなるに違いありません。

「やばい」の問題は、言語使用の能力の問題にとどまるものではありません。一〇〇種類の表現を捨て「やばい」の一語を使うことは、一〇〇種類の表現が区別していた一〇〇種類の事柄を味わい分ける力を捨てることと同じだからです。「やばい」を無差別に連発するうちに、事柄を把握する枠組は大雑把になり、感情は粗雑になります。デイトレードで予想外に大儲けするのも、隣家が火事になるのも、街頭ですれ違ったばかりの女性が美しいのも、グーテンベルクの「四十二行聖書」が一〇円で売りに出ているのも、硬い煎餅を噛んで歯が欠けるのも、すべて「やばい」点では同じことになってしまいます。考える力、感じる力とは、言葉を正確に使い分ける力に他ならないのです。

映画を観たあと、観たばかりの映画について熱く語った経験は誰にでもあるはずですが。このようにとき、私たちは、語らずにはいられないという感じ、いくら語っても語り尽くすことのできないもどかしい感じにつき動かされています。

このような感じは、決して不自然ではありません。藝術作品を享受するときには惹き起こされる複雑な感動の正体を見きわめるには、何よりもまず、説明に多くの言葉を必要とするからであり、さらに、もどかしい感じとともに説明を重ねるうちに、感動の正体が少しずつ明らかになり、感情が経験として獲得されるからです。感情というのは、決して単純なものではないのです。

感動の正体は、映画を観て感動した私たち一人ひとりのあり方を示し、自己了解の手がかりとなるものです。それとともに、感動は、表現を与えられ、他人と共有されることにより、普遍的な

意義を獲得します。感情は、私のあり方と世界のあり方を同時に指し示すものであり、この意味において、共有されることにより初めて意味を持つもの、本質的に公的なもののなのです。

しかしながら、たとえば映画の評価について「やばい」の一語しか知らない者は、「やばい映画」と「やばくない映画」の二種類しか知りません。「やばい映画」については、これが面白いか、あるいは退屈であるかには関係なく、「やばい映画だからやばい」以上の説明を彼女に期待することはできないでしょう。彼女には、「面白い」と「つまらない」の区別すらできないからです。

私たちは、言語を手がかりにして感情を獲得し、感情を理解し、感情を共有します。感情は、私たち一人ひとりが何者であるかを告げるものであるとともに、私たちが身を置く世界の真相を普遍的な仕方で明らかにするものでもあります。具体的な感情をその都度正しく受け止めることは、自律的な自足的な生存への通路なのです。みずからの心に姿を現す感情の一つひとつを丁寧に吟味し、これを言葉に置き換える努力は、誰にとっても必要であり、価値あるものであるに違いありません。

これに反し、「やばい」の一語を連発する者の目に、感情は、単純で明瞭なものとして、つまり、吟味も説明も必要のないものと映るはずですが。いや、正確に言うなら、彼女の注意を惹くものはすべて、吟味することも説明することもできぬもの、単に「やばい」だけのものとなるでしょう。彼女の前に広がる世界は、ただ二色に塗り分けられたもの、濃淡もなくグラデーションもないもの、単純きわまるものとならざるをえません。彼女は、感情を慎重に吟味し、自己了解と根源的な真理へと促されるかわりに、「虚偽意識」に支配され、自己喪失と自己欺瞞に陥り、刹那的な行動へと促されることになるでしょう。感情とは、思考と懷疑への道として、そして、根源的な真理への道として把握され吟味されねばならないのです。

（清水真木『感情とは何か——プラトンからアレントまで』による）

問一 空欄 







 に入る語として、最も適切なものを次のア～オの中から選び、それ

ぞれ記号で答えなさい。

ア つまり    イ しかし    ウ そして    エ あるいは    オ ところで

問二 線部①世界のすべての言語は、「若者言葉」と呼ぶことのできる一群の表現を持っています。とありますが、「若者言葉」とはどういう言葉であると言っていますか。文章中から二つ抜き出しなさい。ただし、一つは四十字以内、もう一つは五字以内で抜き出しなさい。

問三 線部②新しく姿を現した若者言葉に、「やばい」という形容詞があります。とありますが、次の指示に従って「やばい」を使って一文をつくりなさい。

- ・本来の意味の「やばい」を使うこと。
- ・自分で考えた主語を入れること。
- ・述語を「やばい」にすること。

問四 線部③「やばい」を使うことにより、感情の質がいちじるしく傷つけられ損なわれるとありますが、「感情の質がいちじるしく傷つけられ損なわれる」のはなぜですか。文章中の言葉を使いながら答えなさい。

問五 線部④感動は、表現を与えられ、他人と共有されることにより、普遍的な意義を獲得します。とありますが、このことを、自分で具体例を考えて、その具体例を使って説明しなさい。

問六 線部⑤彼女は、感情を慎重に吟味し、自己了解と根源的な真理へといたるかわりに、「虚偽意識」に支配され、自己喪失と自己欺瞞に陥り、利根的な行動へと促されることにならう。感情とは、思考と懷疑への道として、そして、根源的な真理への道として把握され吟味されねばならないのです。とありますが、あなたは、これから「言葉」に対して、どのような姿勢で生きていこうと考えますか。七十字以内で答えなさい。

〔二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

「おもしろいことって、なんだろうね」

「さあ？」

「魚が、取り放題①ってたぜ」

「わかった。村中で、かいほりをするんだ」

「そんな、ばかな」

「なんだろうなあ」

僕たちは、町長②の家の納屋③からちようだいしてきた南京袋④をぜんぶ洗い終えると、家路についた。胸ほどに伸びた夏草の土手を、かき分けるように歩いた。

「銀造のやつ、南京袋のこと、気づいてたんだろうなあ」ぽつんと、まさあきがいった。

「たぶん」あきらが、そうこたえと、みんな、うなずいたように見えた。

一日中、遊びほうけたわりには、太陽が、まだずいぶん高いところで、僕たちを見おろしていた。

それからというものの、僕たちは、かいほりの話ばかりしていた。あきらなどは、ウナギを取ったことによほど興奮したと見えて、銀造のことをウナ造と呼んでいたし、道であの黒い自動車とすれちがっても、以前のようにかくれたり、石を投げたりせず、わざわざ目立つように道の真ん中を歩いたりした。しかし、銀造は以前と同じように、ドアのむこうにはげ頭をちらりと見せただけで、そっけなく走り去っていくのだった。

あんなに無邪気⑤な顔で、魚をつかむ大人を見たのも初めてだったし、僕たちの遊びに、参加してきた大人も初めてだった。

「大人は、一日たつと、忘れちゃうのかなあ」あきらが、いつになくさみしそうな顔でそういった。

あつというまに、一週間がたった。朝ごはんを食べていると、あきらの、

「けーんーじ」という声がした。

「どうしたの、こんなに早くから」

「た、たいへんなんだ。川の水がない」

「川の水が？」

「そうなんだ、全然ない、すっからかんなんだ」

あきらについて、僕も家を飛び出した。新橋のところに来ると、まさあきとゆうじが待っていた。それだけじゃない、村の人たちがざわざわと集まっていたのだ。

「すごいよ、すごいよ」

まさあきは、かなり興奮していた。ゆうじは、おびえたような目で川を見ていた。僕も、駆けよって川をのぞき込んだ。

それは、いまだかつて見たことのない光景だった。蜷川⑥の水は、すっかりと干上がり、水底が日にさらされていた。あるはずの水の流れは一筋もなく、ところどころの深みが水たまりとなっていただけだった。水たまりには、逃げ場をなくした魚たちが、背中をさらして右往左往していた。僕たちは、土手の上を上流へと駆けだした。

「おーい、すごいぞ、すごいぞ」

「どこまで行っても、魚だらけじゃあ」

「なんで、こんなことになっただ？」

「わからん」

「銀造が、やったのかなあ」

「わからん、わからん」

本当に、わけがわからなかった。ただわかっているのは、先週、町長がいったとおりに、魚が取り放題になったということだけだった。

振りかえると、新橋の上に人ばかりができていた。

「なんだ、あれ」

よく見ると、橋の上には、南京袋を山積みにしたリヤカーが止まっていた。村人は、それを手にとると、ほいほいと川に下りていくようだった。

「おい、あれ銀造だぞ」

確かに、南京袋を手渡しているのは銀造だった。僕たちは、大急ぎで駆けよった。

「おうっ。お前たちか。よく来たな」町長は、うれしそうにそういった。

「どうしたの、これ」あきらが、たずねた。

「どうしたも、こうしたも、見てのとおりじゃ。さあ、お前たちも拾った拾った」町長は、ろくに返事もせず、僕たちに、南京袋を押しつけた。

「魚、取っていいの？」まさあきが、聞いた。

「ああ、思うぞんぶん取れよ、これが最後だからな」町長は、そういうと次から次へと押しよせる村人に、どんどん南京袋を渡していった。

僕は、町長のいった「これが最後」という意味が気になったが、村人の興奮した声と、みんなの「やろう」という声につられ、川へ駆けおりていった。

川はもはや泥田と化し、人々はまるで石でも拾うかのように、魚を拾っては、これでもかというくらい袋に詰めていった。おじいさんやおばあさんから小さな子どもまで、みんなの歓声が鳴り響いた。町長の、大きな笑い声がこだました。

今、この川では、すべてが人間の思いどおりだった。魚にしてみれば、水のない川ではどうすることもできず、手足を、いや、尾鰭おびれをもがれたも同然で、泥地に白い腹をさらすことしかできなかった。

僕も、全身泥だらけになりながら、たくさんの魚を取ったけれど、<sup>③</sup>だんだん気持ち冷めてきたのに気がついた。

「ゆうじ、なにかちがうよなあ」

「うん、全然ちがう。こんなの、楽しくないもん」ゆうじは、足元の魚を見ながら、そういった。

「自分たちで、かいぼってないからかなあ？」今度は、まさあきに聞いてみた。

「もつと、ほかのことだと思うよ」まさあきは、しばらく言葉を選んでしたが、やがて、こういった。「そうだよ、これはずるいんだ」

「けんじ、どうだ？」と、あきらがやって来た。

「なにか、調子がくるっちゃって」僕がこたえと、あきらも黙ってうなずいた。

結局、僕たち四人は早々に川から上がることにした。しかし、まだまだ村中から、大人や子どもやらが押しよせてくる最中だった。

「どうなっちゃうんだろうな、この川」

「わかんない」

橋の上から、人けのない下流のほうを見ると、黒々とした川底に、点々と横たわる魚が見えた。まるで、それは、白い貝殻のようで、日差しにきらきらと揺れていた。

この事件が、蜷川の埋め立て工事の測量のためであることを知ったのは、三カ月もたってからだった。その年の秋から冬にかけて、半年にもわたる大工事が進められ、蜷川は跡かたもなく埋め立てられた。川の半分は、自動車のすれちがうことのできる道路となり、あとの半分に、コン

クリートの細い用水路がつくられた。僕たちは、学校の行き帰り、毎日、工事の様子を見守ってはいたが、さすがにブルドーザーが入ったときには、

A

春になって、蜷川用水路は完成した。その日は、朝から花火が打ち上げられ、竣工式が行なわれた。僕たちには、どうでもいいことだったけれど、つつい振るまわれるお汁粉とお菓子につられて、みんな集まってしまった。新橋は、ガードレールのついたコンクリートの橋となり、僕たちはそれによりかかった。

「清水の土管も、青大将の石垣も、なくなっちゃったな」

「クワガタの木も、切り倒されちゃったな」

すべてが埋め立てられ、太い道になっていた。そして、用水路沿いには、か細い桜の苗木が等間隔で規則正しく植えられていた。雑音まじりのスピーカーから、町長の声が聞こえた。

「やがては、この桜並木が大きく育ち、この桑原を自然の豊かな村にしてくれるでしょう」

酔っ払った大人たちの拍手と、歓声が聞こえた。

「いい気なもんだぜ」あきらが、大人びた口調でいった。

あきらには、少し裏切られたような、悔しい気持ちがあるらしい。確かに、あの日、ウナギを取ってみせた銀造と、今、酔っ払って話をしている町長は、同じ人物とは思えなかった。

「あのカエル、どうするんだろう？」今度は、ゆうじが、ぼつりといった。

「カエル？」

「ほら、あそこにいるだろう」

一・五メートルほどの切り立つコンクリートの用水路の底に、十センチほど水がたまり、そこに一匹のトノサマガエルがいた。カエルは、その端に手をかけじっと天を見上げていた。

「そうだよ、あのカエルだって、一生ここから出られないんだよ」ゆうじは、めずらしく怒った

声でいった。

みんなは、それぞれの思いでここに立っているようだ。僕は僕で、味気なく、真っすぐに伸びた用水路を見ながら、全然ちがうことを考えていた。

それは、何力月も前のことだった。

図画の時間、一枚の白い画用紙が手渡され「一番大切なものを描きなさい」という課題が出た。僕は、図画が得意だったので、張りきっていたのだが一番大切なものが見つからなかった。

早い子は、五分もすると描き出した。お父さんを描く子、友だちを描く子、宝物を描く子、いろいろだった。僕には、大切なものはたくさんあったが、一番となると決められなかった。二十分がたち、三十分がたち、とうとう、あと十分になった。僕の目には涙が浮かんた。みんなは、描けなくて泣いたと思っただろうが、そうじゃない。一番大切なものが、決められなかったからなのだ。

終了後、担任の先生が来て、こういった。

「けんじ、描けなかったのか」

僕は、うつむいたまま黙っていた。

「まあ、むりに描かなくてもいいさ。なにも描かないでおくことも、それはそれで大切なことだ。なにもしないほうがいいことだってあるからな」先生は、そういうと僕の頭をぽんぽんと叩いた。

⑤真っ白な画用紙が、やけにまぶしく見えた。

⑥どうして、こんなことを思い出したのか、自分でもよくわからなかった。

あきらの投げた小石に驚いて、トノサマガエルが上流へ泳ぎ出した。どこまで行っても、どこまで行っても、土手には上がれないことも知らずに。

大人たちの宴は、まだまだ続くようだった。

（阿部夏丸『泣けない魚たち』による）



問一 線部①かいぼり とありますが、「かいぼり」とはどのような遊びですか。文章中の言葉を使いながら答えなさい。

問二 線部②町長 とありますが、子どもたちは「町長」のことを、何と呼んでいますか。文章中からすべて抜き出さない。

問三 線部③だんだん気持ちが冷めてきたのに気がついた とありますが、なぜ「気持ちが冷めてきた」のですか。文章中の言葉を使いながら答えなさい。

問四 空欄 A に入る語として、最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 声を弾ませてしまった
- イ 声をなくしてしまった
- ウ 声に通ってしまった
- エ 声を潜めてしまった

問五 線部④少し裏切られたような、悔しい気持ちがあるらしい とありますが、「どのような思っていたことに対して、どのように裏切られたのか」がわかるように、この時の気持ちを、文章中の言葉を使いながら答えなさい。

問六 線部⑤どうして、こんなことを思い出したのか、自分でもよくわからなかった とありますが、なぜこんなことを思い出したとあなたは考えますか。文章中の内容に触れ、七十字以内で答えなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文（文節で区切つてある）の主語と述語を記号で答えなさい。文中になければ「なし」と答えなさい。

- (1) もう<sup>ア</sup> 暗い<sup>イ</sup>から はやく 帰りなさい<sup>エ</sup>。  
(2) あの<sup>ア</sup> 失敗<sup>イ</sup>で こんな 結果<sup>エ</sup>に。

問二 下の意味を読み、□にあてはまる最もふさわしい言葉を、漢字一字で答えなさい。

- (1) □をかく (意味) 予想をくつがえして相手を出し抜くこと。  
(2) □とった杵柄<sup>きねづか</sup> (意味) 一度覚えたことは、後までそれを忘れず発揮できること。

問三 次の文を読み、線部を正しい尊敬語または謙譲語に直しなさい。

- (1) 私が、校長先生の自宅に行きます。  
(2) 校長先生が、私の家に来ます。

問四 次の作品の中から「太宰治」の著書を、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間失格    イ 鉄道員    ウ ひめゆりの塔    エ 奥の細道

問五 次の各文の線部を漢字に直しなさい。

- (1) カクギで決定する。  
(2) 仏前に果物をソナえる。  
(3) 人にチュウコクする。  
(4) 林の中をサンサクする。  
(5) 名画をモシヤする。  
(6) イクエにも取り巻く。



\*印には記入しないでください。

|      |    |
|------|----|
| 受験番号 | 氏名 |
|------|----|

[illegible][illegible]

| 問五  |     | 問四 | 問三  |     | 問二  | 問一  |
|-----|-----|----|-----|-----|-----|-----|
| (4) | (1) |    | (2) | (1) | (1) | (1) |
|     |     |    |     |     |     | (2) |
|     |     | 述語 |     |     |     |     |
|     |     |    |     |     |     |     |
| (5) | (2) |    |     |     |     | (2) |
|     |     |    |     |     |     | 主語  |
|     |     |    |     |     |     |     |
| (6) | (3) |    |     |     |     |     |
|     |     |    |     |     |     |     |